

今こそ巣立ちの時がきた

2、3月にたくさんのお読者から電話やメールを頂いた。たいていは東北か北陸の稲作地域からだ。

「集落座談会などで行なわれる生産調整に関する説明が、米政策改革大綱の趣旨とはおよそ別物になつていて」

政策は市町村へ下りてくる中で勝手に変えられている」と。

説明にあたる者がそれを理解していないというより、行政やJAが自分た

ちに都合のいいように政策を解釈して集落の農民に説明しているのである。改革大綱がいうところの「担い手」あるいは「認定農業者」という存

在も有名無実化され、改革大綱の中身

を指摘しつつ反論しても、集落の論理も使って恫喝を加えながら、数の論理で押し殺されてしまうという。

「捨て作りでも作れば懐に入る生産調整加算金を貰いたい」という農家のホンネがもろに出て来ているのが今年であり、そのため農地の貸しはがしのようない事態も生じていて。また、そこには切羽詰った農協の思惑も反映されている」と伝えてきた読者もいた。そのため、飯米農家を除くJA組合員全員を「担い手のリスト」に入れるといった集落すらあるそうだ。

そもそも、一定条件を満たした農業経営者が自

「江刺の稻」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育つた稻。全く管理されていないこの稻が、手をかけて育てた畦の内側の稻より立派な成長を見せていく。「江刺の稻」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

江刺の稻

うだ。

日本農業を滅ぼそうとしているのは、外圧でも消費者の身勝手でもない。それは物貰い根性しかない農民自身で

あり、その被害者意識と物貰い根性を煽り続けて自らの居場所作りに躍起となってきた亡国の政治家たちと農業関係者なのだ。そんな輩に限って、食糧自給率云々だと農地の荒廃などといふのだから始末が悪い。

地域の米作りへの執着度（経済依存度ではない）やこれまでの地域農政の違いによつても農業経営者が抱える困難には強弱があるだろう。しかし、そうした問題を指摘する友人たる読者たちにあえて申し上げたい。気持ちは理解できるし、現実は矛盾に満ちている。また、使える制度や補助があるのなら使うのもよからう。しかし、そんな農業経営者自身の怒りや葛藤の中に、結局は農業政策に依存しようとする弱さは無いだろうか。同じ稲作を中心には伝わっていないよ

を納得させる言葉と実績を示しつつ問題を解決している人々もいる。地権者はなく農業経営者、そして事業者としてはあたりまえの仕事の一部だ。

でも、本誌は何でそんなに米にこだわるのだと言いたい。そもそも誰にでもできる米作りだから生産過剰なのではないのか。読者の中には本誌の勧めで10ha単位の馬鈴薯作りに取り組む経営者集団、あるいは東北から関東、北陸の5人の読者がネットワークを組んで馬鈴薯作りに取り組み、それを通して水田地域での新しい経営の形を作り出している人々もいる（36頁参照）。

「巢」に生みつけられた雛鳥は巣立ちをする時まで自分が今いる「巢」の存在を理解しない。彼らは巢の外にある世界や外敵に怯えながら親から与えられる餌を奪い合い、場所取りにうつぶを抜かしている。そして、自分を守るためにあえて申し上げたい。気持ちは理解できるし、現実は矛盾に満ちている。また、使える制度や補助があるのなら使うのもよからう。しかし、そんな農業経営者自身の怒りや葛藤の中に、結局は農業政策に依存しようとする弱さは無いだろうか。同じ稲作を中心には伝わっていないよ

今こそ巣立ちの時がきた。